石井十次
顕彰会だより　vol.32

公益財団法人　石井十次顕彰会

公益財団法人　石井十次顕彰会

大阪児童福祉事業協会が取り組む アフターケア事業に石井十次賞を贈呈

社会に出て感じるギャップ 相談にのり、サポートする

石井十次顕彰会は、今年度の石井十次賞を大阪市にある社会福祉法人大阪児童福祉事業協会アフターケア事業部に贈呈しました。

児童養護施設や里親のもとで暮らす若者たちはいずれ社会に出て、自立していくことを求められます。しかし、自立後、施設の生活と社会生活とのギャップに直面し、苦悩する若者も少なくありません。そんな若者に対し、相談にのり、仕事や家庭生活面で安心できるようサポートすることをアフターケアといいます。社会福祉法人大阪児童福祉事業協会（伊山喜二理事長）のアフターケア事業部はその活動で全国から注目されている団体です。

設立されたのは、1964（昭和39）年のこと。当時、日本は高度経済成長期のなかにあり、就職先はたくさんありましたが、施設や里親のもとで暮らす若者たちには社会で暮らすためのアフターケアが重要であると大阪市と協議のうえ事業を開始。その取り組みは先見性に富んでいました。

特に2001（平成13）年から開始された「ソーシャル・スキル・トレーニング」は画期的でした。

これは、大阪府下の児童養護施設や里親のもとで暮らす若者を対象に、高校教諭や弁護士、アナウンサー、薬剤師、デパートの美容部員らを招いて、身に付けておきたいマナーや身近な法律などを学ぶもの。

しかし、当初は面接指導や自身の健康管理など、3つほどのプログラムにとどまり、参加施設も9施設、参加人数は延べで61人にすぎませんでした。

電話の受け方はどうするの？

ところが、名刺の交換はどうしたらいいの？　電話の受け答えがよくわからない、お金に困って借用書にハンコを押したらいつの間にか返済額が膨大になったなどと、さまざまな問題を抱えていることがわかってきました。

そこで、こうした悩みごとに対処すべくプログラムを充実させ、現在ではビジネスマナーをはじめ、14ほどのプログラムを約8か月かけて実施。第1回目から合計すると延べ6000近くの施設、2万人を超える若者が参加してきました。

国事業のモデルになる

一方で、この活動に賛同する団体や企業も増え、団体では日本財団、企業では資生堂やソフトバンクなどが協賛。さらに大阪府や大阪市、堺市はもとより、厚生労働省も熱い視線を注ぎ、国事業のモデルに取り上げています。

こうしたアフターケア事業に対し、石井十次顕彰会はこども家庭庁の設置や改正児童福祉法の施行などにも影響を与えたとし、石井十次賞の求める開拓性、創意工夫、持続性、ニーズ対応への実践力が発揮されていると高く評価。石井十次賞を贈呈することにしました。

伊山理事長は「福祉に携わる者は必ず石井十次先生のことを学びます。そんな偉大な方の賞をいただき、大変光栄に思っています」とよろこびを語っています。

写真上は伊山喜二理事長。左はソーシャル・スキル・トレーニングの修了式。下は事業部があるビル

▲ 選考経過を述べる石井十次賞選考委員会の潮谷義子委員長

写真右上は、事業部内にあるフリールーム。かつて事業部の支援を受けた若者たちが自由に立ち寄ることができる。下は事業部。若者たちが暮らす寮設備も整っている（写真上＝清心寮）

▶ 表彰状全文

石井十次賞

社会福祉法人 大阪児童福祉事業協会
アフターケア事業部　殿

貴　社会福祉法人大阪児童福祉事業協会「アフターケア事業部」は昭和三十九年に設立以来　児童養護施設での生活を余儀なくされた子どもたちが　施設を退所後も自立した生活が送れるように　相談活動をはじめ社会生活をしていく上で必要な知識や法律　社会常識などを学び　生活技能を体得することを目的としたソーシャル・スキル・トレーニング講習会を　全国に先駆けて実施され施設を退所した子どもたちの健全で幸せな自立を支援してこられましたアフターケア事業が行政施策として全国展開するきっかけとなったこれらの先駆的な取り組みは　常に子どもの人権を最優先に考えられた児童福祉事業の先駆者石井十次先生と志を同じくする偉業であり　心から敬意を表し　第三十二回石井十次賞を贈り　その功績を称えます

令和五年四月十三日

公益財団法人　石井十次顕彰会
理事長　萱嶋　稔

生徒が感じた十次からの学び

第41回石井十次生誕記念式典で発表

「石井十次賞贈呈式」に引き続き、「石井十次生誕記念式典」をたかしんホールで開催しました。

41回目を迎えた式典では最初に石井十次像に向けて献花。続いて8回目となった「石井十次なわのおび賞」の選考過程を高鍋町教育委員会の島埜内遵教育長が報告しました。

今回は高鍋東小学校の上野佑月さんら5人と1グループが受賞しています。

そして、高鍋東小学校の佐藤里咲さん、高鍋西中学校の大田桃歌さん、高鍋高等学校の小西萌加さんらが石井十次への思いをつづった作文を発表。十次からの学びを今後の学校生活や人生のなかにどう活かしていくかなど、決意を述べました。

最後に、「ひとつぎ会」のみなさんが「石井十次の踊り」を披露。会場から温かい拍手が送られるなか、式典は幕を閉じました。

意見発表

石井十次先生の学びを通して

高鍋東小学校　5年　佐藤　里咲

「石井十次は世界の偉人」

これは、私が明倫保育園に通っていた時に行事や朝の会の時に歌っていた歌の最後の部分です。この歌を歌っていたころは、歌詞の意味が分かりませんでした。4年生になり、社会科で石井十次先生のことを学んだことで、自分たちが歌っていた歌詞の意味が少しずつ分かり、もっと十次先生のことをくわしく調べたくなりました。

十次先生は、とても優しい人です。そのやさしさが分かる話が二つあります。

一つ目の話は、十次先生が7才の時のことです。ある祭りで帯の代わりに縄をしめていた子が、みんなにからかわれて泣いていました。十次先生はその子の縄と自分の新しい帯を交かんしてあげたのです。とても優しく思いやりのある行動です。そのことが、明倫保育園の時に歌っていた一番の歌詞に出てきます。

二つ目の話は、困っている多くの子どもたちを助けたことです。十次先生は、戦争でひがいを受けたり、大きな災害が起こったりするたびに、その地に出かけ、多くの子どもたちを預かったそうです。

このような十次先生の生き方や考えを学び、私はいろいろなことを考えさせられました。私は、十次先生を見習い、困っている人がいたら助けてあげる心やさしい人になりたいと思いました。私は、緑の少年団の人たちと一緒に募金活動をしたことがあります。困っている人の役に立ちたいと思って参加し、大きな声で「募金をお願いします。」と言いながら、いろんな場所を歩き回りました。募金活動をして人を助けようと思っていましたが、募金をしてくれた人から笑顔をもらい、私の方が心が温かくなりました。十次先生も、孤児のありがとうという笑顔から、またがんばろうという意欲が出てきたのではないかなと思いました。

最後に、「石井十次は世界の偉人」

本当に石井十次先生は素晴らしい人です。

私も、十次先生のように誰にでもやさしく接して、思いやりの心を持ちながら、一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。

十次先生の教えを生かして

高鍋西中学校　3年　大田　桃歌

十次先生が生きた時代には、戦争による貧困、虐待など、様々な事情を抱える子どもが数多くいました。

世間の人々はそんな子どもたちを軽蔑し、救いの手を差し伸べませんでした。ですが、十次先生は見捨てず、生涯をかけて孤児救済に努めました。

人は、自分の親や身近な大人を見て育ちます。それはいつの時代も変わらないと思います。彼の元には親を亡くした子もやってきました。十次先生の元に来なければ、寄り添う大人がいないままの子どもたちでした。それに対して、私は健康で、明日、そして未来を見据えて生活できます。食べ物も豊富にあり、心も体も満たされ、不安なんて少ししかありません。私が不安だと感じることも、当時の人から見ればささいなことかもしれません。生きるだけでも大変だった当時ですから。

十次先生の教育には、子どもたちを幸せにしたいという強い気持ちが見えます。

その一つ密室教育は、一人一人の子どもと向き合い、正面からその気持ちを受け止めるというものでした。先生を前にして、子どもたちは楽しいこと、悲しいことなどを、たくさん話したことでしょう。

人に相談されたとき、どう反応すればよいか、難しいと感じることが私にはあります。でも私にとって、議論することはとても楽しいことです。議論していると、自分と異なる意見や表現の仕方、言葉の柔らかさなど、多くのことに気づくからです。十次先生は子どもたちに、議論を通して考えを広めていくように指導されていたのではないでしょうか。人との意見の交換は、自分を成長させる大きな要因だと思います。

私がこのように考えるようになったのは、母の影響です。母に私は、悩みや学校のことなどいろいろなことを相談します。すると、いつもしつこいくらいに自分の考えを伝えてくれます。感謝すべきこと、正しいこと、間違っていることもちゃんと言葉で伝えてくれます。そんな母の背中は、たくましく美しく見えます。子どもたちの目には、十次先生の大きな背中は、たくましくてお手本にすべき大人にきっと見えたことでしょう。

どんなに自分が苦労しようとも、子どもたちを思い、諦めずに努力、挑戦された十次先生。一人一人の子と向き合いながら成長を見守り、一生をかけて孤児救済を実践されました。だからこそ、十次先生は今もなお、そしてこれからも尊敬される人なのでしょう。

現在はインターネットを通して世界の現状を知ることができます。困っている子どもたちはたくさんいます。私たちにもできるその子たちを救う手段がいくつかあるようです。救いたいと思う人たちが動き始めるきっかけづくりを、私はしていきたいと思います。十次先生の生まれたこの高鍋から。

「人に尽くさん」～石井十次先生の教えを胸に～

高鍋高校　3年　小西 萌加

石井十次先生は、この高鍋の地で生まれ、生涯に救った孤児は3千人にのぼると言われています。先生が生まれたのは1865年、優しい母の影響を受け、困っている人を放ってはおけない青年に成長します。17歳の時、宮崎病院長の荻原百々平氏と出会い、医学の道を勧められます。しかしこの頃、イギリスで1万人以上の孤児を救済した孤児院のジョージ・ミュラー氏が来日し、先生はその生き方に感銘を受け、「医者になる者は他にいるが、孤児救済は自分にしかできない」と確信し、その生涯を孤児救済に捧げることを決意しました。

私が石井十次先生の業績を学ぶ中で特に関心を持った部分は、孤児救済の道を決意した後の「行動力」です。先生は、孤児たちのために小学校を設立したり、日本国内や海外などで寄付金を募る演奏会を開催したりしました。現代の世の中では、頭では分かっていても、周囲の目が気になったり、誰かがやってくれるだろうと考えたりしてしまいがちです。石井十次先生の、自分の生涯をかけて孤児の救済に取り組む行動力に、愛情と覚悟を感じました。

また、私は石井十次先生の生涯と自分の高校生活との2つの共通点に気づきました。一つ目は、出会いは人生のターニングポイントだということです。私は現在、高鍋高校ＪＲＣ部顧問の渡辺幸一先生との偶然の出会いがきっかけで、ＪＲＣ部（青少年赤十字部）で献血活動や防災活動、募金活動など、人々の助けとなる様々な活動に励んでいます。石井十次先生がミュラー氏に出会って「孤児を救おう」と決意したように、私はこの出会いのおかげで、赤十字活動に取り組む機会に恵まれました。このように、出会いはその人の人生を変えるターニングポイントなのだと感じます。だからこそ、様々な人々や色々な物事との出会いを大切にしていこうと考えています。

もう一つの共通点は、「人の命を救う活動」という点です。何気なく入部したＪＲＣ部でしたが、来校して下さる講師の方々の「人のために」という熱い気持ちや、先輩方の活動に熱心に取り組む姿を見て、私も本気で「人を救おう」と決意しました。人を傷つけるのは人ですが、人を救うのも人なのです。皆さんも、ぜひ「自分になんかできない」と思わず、どんな小さなことであっても人を救う活動を始めてみて下さい。

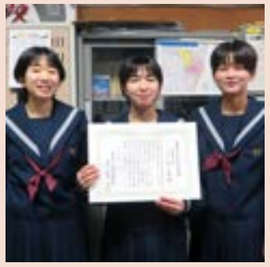
最後に、特に私が好きな石井十次先生が残された言葉を紹介します。『成せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず成らん。』これは国会における故安倍晋三首相による施政方針演説でも使われた言葉です。結果が出ないからといってすぐに諦めてしまうのではなく、粘り強く試行錯誤を繰り返せば、必ず成果が表れるという意味です。

石井十次先生の弱者救済の考え方を受け継ぐここ高鍋の地で、より良い社会を築くために、共によく勉強し、よく活動して参りましょう。石井十次先生の教えを胸に「人に尽くさん。」

第８回なわのおび賞
受賞者紹介

第８回目を迎える「なわのおび賞」。本賞にふさわしい５名と１グループのみなさんが受賞されました。おめでとうございます。

高鍋東中学校　バレーボール部　代表　黒木優心さん（くろき・ゆうしん）



３年生６名、２年生３名、１年生１名の計10名の女子部員全員が「挨拶」「返事」「奉仕の気持ち」を意識して部活動。特に挨拶は寒い日も暑い日も毎朝校門に立って挨拶し、近くを登校する小学生や住民の方から評判がいい。「返事」「奉仕の気持ち」も、学校生活のあらゆる場面で生徒の模範になっている。

高鍋高等学校　２年　小西萌加さん（こにし・もえか）

高鍋高校の青少年赤十字（JRC）部長として活動。部員をまとめ、災害ボランティアセンターの体験訓練や「高鍋町総ぐるみ献血」で献血の受付、献血の町内呼びかけなどを行った。何よりも素晴らしいのは、募金の集計や各種発表のまとめを陰ながらも率先して行う人物であることだ。学業面・高校生活面で高鍋高校の模範となる生徒である。

高鍋農業高等学校　２年　清水謙斗さん（しみず・けんと）

人を思いやりながら行動でき、責任感をもって自分の役割をやり遂げる、クラスメイトから慕われている生徒である。獣医師になるという目標を掲げ、高成績を維持。酪農経営研究部員として週末も寮に残り、牧場管理に取り組んでいる。また、地域貢献として行った「酪農教育ファーム」では参加者に酪農の魅力を伝え、学習の成果を活かしていた。

高鍋東小学校　６年　上野佑月さん（うえの・ゆづき）

授業中は自分の考えを進んで発表。自己研鑽に努めることができている。朝のボランティア活動では率先して取り組み、ほかの児童が参加しやすいよう工夫もしている。運動会では応援リーダーを務め、団長らと協力しながら団をまとめることができた。家庭でも進んで手伝いをするなど、周囲のよい手本になっている。

高鍋西小学校　６年　高瀬　桜さん（たかせ・さくら）

何事においても責任をもってやり遂げることができており、誰に対しても思いやりの心をもって接している。授業中は集中して学習に取り組んでおり、友達の意見を引き出すことがある。掃除も心を込めて取り組んでおり、下級生のお手本になっている。また、「石井十次顕彰のつどい」では劇の脚本をつくり、みんなといっしょに劇にも取り組んだ。

高鍋西中学校　３年　別府胡麦さん（べっぷ・こげつ）

１年次から生徒会役員を務め、２年次には副会長として学校の場で中心となって活躍してきた。笑顔で前向きに取り組む姿は周囲にいい影響を与えている。学習ではSDGsの発表の進め方で多彩なアイデアを提案。各地自治体が参加する「嚶鳴フォーラム」では、石井十次について堂々と発表を行い、高鍋町の次世代のリーダーとして活躍が期待できる。

ご報告

このたび、みなさま方より多額のご寄附をいただきました。
ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を記させていただきます。
（令和５年１月１日～令和５年 12 月 31 日）

篤志寄附

高鍋町　株式会社　増田工務店様
高鍋町　株式会社　高鍋衛生公社様
高鍋町　有限会社　事務機のフクモト様

忌明寄附

高鍋町　金田　一成様
高鍋町　福本　幸良様

編集後記

「石井十次顕彰会だより」第32号をお届けいたします。今回の石井十次賞は、社会福祉法人大阪児童福祉事業協会アフターケア事業部さまに贈呈させていただきました。

事業部事務所は大阪市天王寺区の社会福祉関係の団体が入るビルの３階にあり、伊山喜二理事長と藤川澄代理事がにこやかに迎えてくださいました。取材をさせていただくと、事業部の支援を受けた若者たちの社会に出てからのさまざまなエピソードを聞かせていただき、陰に隠れてしまいがちになるアフターケアがいかに重要か再認識した次第でした。

さて、年明け早々、悲しい出来事が相次ぎました。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りしますとともに、被災地の１日も早い復興を願っております。

最後になりましたが、みなさま方のご健勝、ご多幸をお祈りし、引き続き当顕彰会活動にご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

発行日　２０２４年３月１日
発行元　公益財団法人　石井十次顕彰会
〒８８４－０００６
児湯郡高鍋町大字上江８１１３番地
☎０９８３－２３－４３１２

第 31 回を迎えた「石井十次顕彰のつどい」

令和５年 11 月 18 日、たかしんホールで
創意工夫に満ちた「発表」に大きな拍手

第 31 回「石井十次顕彰のつどい」を令和５年 11 月 18 日、たかしんホールで開催しました。町民のみなさんが熱いまなざしで見守るなか、高鍋西小学校の５年生、６年生が合唱や合奏を披露。「十次先生の思いを引き継ぐ発表」では、５年生、６年生がテーマ別にグループをつくって分かれ、それぞれにスライドを駆使したり寸劇を交えたりするなど創意工夫。わかりやすさ、伝わりやすさを競うように表現して、見応えのあるステージを展開してくれました。会場からは、その生徒たちの思いに応えようと、大きな拍手が送られていました。